

Baker (1876) と Schindler (1925) とが偶然にも 同じ変種名を使って、var. *macrocarpum* とそれぞれ命名していたもので、これは明らかに母種と異なる変種である。

次に新しい形であるが、豆果と果柄が全く無毛の個体がある。1981年に私の研究室の大学院生、陳子聡 (Tzu-tzung Chen) 君がこの形を見付け、注意してくれた。そこで、その後多くの標本を調べ、また1982年の台湾産マメ科植物調査の折にも本種の毛の変異について注意してみた。典型的な形では豆果と果柄には細かい鉤毛があり、さらに果柄には長さ約 1 mm の白軟毛の混る場合がある。まれに殆んど無毛に近い形が中部ネパールからの標本でみられた。しかし、全く無毛である形は東部ネパールに限られ、他の地域ではみられない。新品種として区別しておくこととした。

本種の変異と分化について地理的分布からみると、ヒマラヤ東部において形態的な多様化が起っているように見える。しかし、他の地域についてみると、個体あるいは集団としての変異に地理的な特定の傾向はみられない。

---

□白石市植物誌刊行会：白石市植物誌 256 pp. 1983. 非売品。宮城県白石市のフロラと民俗植物記で、同市在住の方々を中心とした宮城・福島県のアマチュア26人の熱心な協力によってまとめられた。環境、植物、生活と植物の3章から構成されている。第2章植物では、蘚苔と高等植物の目録が含まれており、高等植物目録では分布一覧表に地域内の種類をまとめている。調査地域を平地から高山（蔵王山塊）まで海拔高によってまず5区に分け、その中の丘陵帯だけを水平的に阿武隈山地帯と東北山地（奥羽山脈）側とに細分して示しておき、次に各種類ごとにそのどこに生育しているのかを表示してある。さらに、日本国内での北限、南限、東限および太平洋北限が地域内にあれば、それも示している。この点、全体のスペースが儉約されているため一目で多数を比較してみることができるので、分布状態について理解しやすい。この地域は日本海要素と太平洋要素あるいは南方系と北方系という、東西あるいは南北の植物分布の混り合っているところであり、正確な目録と詳細な分布の記録が望まれていた。本書はこの要望に充分に答えるものであり、刊行会諸氏の努力を高く評価したい。印刷、製本ともによくできている。非売品であるが、入手については鈴木六一郎氏（白石市██████████）に問い合わせるとよい。（大橋広好）